

OKADA-ROOM Vol.2 ～旅する画家～

会期 2015年9月18日(金)～12月13日(日)

今期のOKADA-ROOMでは「旅する画家」のテーマのもと、岡田三郎助が旅先で描いた風景画などを御紹介します。また、岡田が洋画家を目指すきっかけとなった人物で、海外で洋画を学んだ最初期の日本人である百武兼行（1842～1884）、そして岡田のフランス留学時代の師であるラファエル・コラン（1850～1916）の作品も展示します。

岡田が生きた明治から昭和は、日本の近代化への扉がひらき、多くの日本人が海を渡り、ヨーロッパで洋画を学んだ時代でした。さらに国内では、鉄道や車などの交通網が発達し、誰もがより気軽に旅を楽しむようになりました。岡田もまた、時には仲間と連れ立って、時には一人で、日本、そして世界に旅立ったのです。

それぞれの地に美を見出し、絵筆をふるった画家の果てない好奇心を感じてください。

出品目録

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
1	西洋婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1900（明治33）	45.4×37.9	油彩・カンヴァス	館蔵

光の生み出す色彩を追って

この婦人像は岡田32歳の頃、フランスに留学して3年目に描かれた。留学期の岡田はコランの門下生として、屋外での制作を通じて外光下での表現に磨きをかけていった。描写にやや硬さが残るが、背景の緑、女性の顔の肌色、服の白色がコントラストをなし、岡田の持ち味である繊細な色彩感覚を十分にうかがわせる。

2	タンバリンを持つ少女	Girl with Tambourine	百武兼行	1881（明治14）頃	65.0×54.5	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）
---	------------	----------------------	------	-------------	-----------	----------	---------

物憂げに思い沈む異国の少女

外務書記官として、百武が3度目にヨーロッパを訪れた時期に描いたもの。物憂げに目を伏せ、タンバリンを持つ手元を見つめる少女は謎めいた雰囲気をもつ。幼い頃、岡田は東京・葵坂の鍋島邸内で百武の油彩画を目にし、その陰影の効果に大きな衝撃を受けた。幼い彼は百武を真似て、陰影を付けた絵を描くことを試みたという。

百武兼行（ひやくたけ・かねゆき、1842～1884）

現在の佐賀市片田江に生まれる。1871（明治4）年からの鍋島直大（第11代佐賀藩主）のヨーロッパ巡遊に随行し油彩画に出会い、のちロンドン、パリ、ローマで本格的に学ぶ。いち早く西洋で油彩画を学んだ日本洋画界のパイオニアの一人。代表作の《臥裸婦》（石橋美術館蔵、2016年にブリヂストン美術館に移管予定）は、日本人が油絵具で描いた裸婦の最も早い例である。

帰国後に農商務省に出仕するが、病を得て帰郷し、42歳で没した。

3	やせ 八瀬の里	Village Yase	岡田三郎助	1906(明治39)	75.9×56.6	パステル・紙	館蔵
---	------------	--------------	-------	------------	-----------	--------	----

パステルで描かれた山村の秋

八瀬とは京都・比叡山の麓に位置する小村の名前。この年の春、岡田はフランスで知り合った洋画家の小林千古と京都に遊び、共に制作に励んだ。牛に車を引かせる農夫の奥にそびえる山が比叡山であろうか。山の量感がパステルで的確に表現されている。

パステルの柔らかい調子を岡田は好み、留学中からたびたび用いていた。

4	収穫	Harvest	岡田三郎助	1912(明治45)	60.1×87.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	----	---------	-------	------------	-----------	----------	----

西洋の美と日本の風景の融合

実った稲穂の収穫が行われている秋の夕景である。画面全体を温かく柔らかい色調で統一し、湿気を含んだ水田の空気を巧みに描き出している。本作は渡欧前に描いた風景画のリメイク作品の可能性はあるが、帰国後の岡田は、和服姿の女性や山野の風景などを描きながら、日本的な画題の中にヨーロッパで学んだ技術や美意識を織り込んでいった。

5	庭	Corner of a Garden	岡田三郎助	1919(大正8)	45.5×33.3	油彩・カンヴァス	館蔵
---	---	--------------------	-------	-----------	-----------	----------	----

燃えるような色彩で、身近な自然を描く

ポスト印象派を思わせる荒々しい筆致と、赤や黄色の大胆な原色の遣い方が特徴的な作品。右に白いベンチが見え、自宅のアトリエの庭を描いたと考えられる。

岡田はこの前年に、壁画制作のため台湾に滞在していた。南国の陽光が、本作に影響を与えたかもしれない。「優美」「典雅」と評されることが多い岡田の、別の一面を見ることができる作例である。

6	日だまり	Sunny Side (Intimité)	ラファエル・コラン	1896(明治29)	60.0×81.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------	-----------------------	-----------	------------	-----------	----------	----

穏やかで親密な世界

うららかな木漏れ日が降り注ぐ中、女性が本を読みながら歩を進めている。背景の素早いタッチが微かな風のそよぎを感じさせ、画面には穏やかさと幸福感が満ちている。木々と女性のドレスにみられる明るい緑と白色のコントラストを、この時期のコランは特に得意とした。なお本作はフランスのサロンに出品されたが、当時は《くつろぎ》(Intimite)という題名であった。

ラファエル・コラン(1850~1916)

フランス・アカデミー派の画家。古典的な技法をもとに、戸外の明るさを積極的に取り入れた外光表現をもって、優雅で上品な女性像を得意とした。その画風は日本人の画家たちに新鮮な感動を与えた。日本の美術品や花々を愛した寡黙な性格で、弟子たちは彼を父のように慕った。コランの薫陶を受けた黒田清輝や久米桂一郎は、帰国後、洋画団体「白馬会」を結成、明治の洋画壇に新風をもたらしたのであった。

7	桃の林 (大石田横山村)	Peach Garden (Yokoyama-mura, Oishida)	岡田三郎助	1917(大正6)	50.0×60.6	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----------------	---------------------------------------	-------	-----------	-----------	----------	----

豊かな果樹園への讃歌

山形県北村山郡横山村(現在の北村山町)には、りんごや桃、桜、すもも、梨の木が茂る広大な果樹園があった。知人にここを紹介された岡田はすっかり気に入って、本作を描いた。霞がかかった空に向かって枝を伸ばす桃の木々が、リズムカルなタッチの厚塗りで表現され、みなぎる生命力を見る人に伝える。

8	ローマの古橋	Old Bridge in Rome	岡田三郎助	1930(昭和5)	22.0×27.0	油彩・カンヴァス ボード	館蔵
---	--------	--------------------	-------	-----------	-----------	-----------------	----

薄暮に浮かび上がる古代ローマの橋

古代ローマ時代に建設されたローマ郊外の橋、ノメンターノ橋(Ponte Nomentano、現在の橋は19世紀の再建)を描いたと思われる作品。旅行中に立ち寄ったのであろう。空を大きく切り取り、暗めの諧調の中に青色を配すことで、この小さな橋に積み重なった年月までも感じさせる、静謐で抒情的な画面に仕上がっている。

9	コロアの池	Corot's Pond	岡田三郎助	1930(昭和5)頃	33.0×24.0	油彩・カンヴァス	個人蔵(寄託)
---	-------	--------------	-------	------------	-----------	----------	---------

風景画の大先達、コロアへのオマージュ

岡田にさかのぼること約100年前、バルビゾン派の風景画家、カミーユ・コロア(1796-1875)はパリ近郊のヴィル＝ダヴレーに別荘を構え、湖を題材に多くの作品を制作した。ヨーロッパでの旅の道中、岡田はこの湖を訪れ、コロアの愛したこの地で制作を行った。柔らかな配色とうねる筆致が特徴的である。

10	フローレンス風景	Landscape of Florence	岡田三郎助	1930(昭和5)	22.0×28.1	岩絵具・絹	館蔵
----	----------	-----------------------	-------	-----------	-----------	-------	----

岩絵具で描かれた色鮮やかなフィレンツェ

旅に同行した画家、大橋了介おおはし りょうかいの回想によると、岡田はアルノ川に面したホテルの窓から、現在も観光地として名高いこのヴェッキオ橋を描いたという。建物同士の重なりかさねの描写やカラフルな色彩が際立ち、軽やかかつ装飾的な画面に仕上がっている。フィレンツェの街並みのリズムの面白さに、岡田は惹きつけられたようだ。

11	富士山(三保にて)	Mt.Fuji (view from Miho)	岡田三郎助	1920(大正9)	137.3×197.5	油彩・カンヴァス	館蔵
----	-----------	-----------------------------	-------	-----------	-------------	----------	----

大画面に広がる富士の偉容

細くたなびく雲と、朝日に照らされた山頂の雪が美しい。富士山の姿は古くから描かれてきたが、近代においては、<日本—国家>の象徴としての役割を担うようになった。なお、岡田とともに白馬会に参加し、東京美術学校で教鞭をとった洋画家、和田英作わだ えいさくの《朝陽富士図》(1917年、旧御物)は、本作とほぼ同一の構図である。

12	富士山	Mt.Fuji	岡田三郎助	1917(大正6)頃	41.0×60.5	油彩・カンヴァス	佐賀県蔵
----	-----	---------	-------	------------	-----------	----------	------

闇に沈む小さな富士山

左の《富士山(三保にて)》とほぼ同じ構図だが、描かれた時期は本作の方が早い。山肌は暗く描かれており、《富士山(三保にて)》とは異なる時間帯の富士山の様子を描いていると考えられる。

13	子持山 <small>こもちやま</small>	Mt.Komochiyama	岡田三郎助	1934(昭和9)	23.8×33.0	油彩・カンヴァス ボード	館蔵
----	--------------------------	----------------	-------	-----------	-----------	-----------------	----

はなむけに贈られた愛すべき小品

子持山は群馬県沼田市の南西に位置し、景勝地として名高い。本作は岡田宅の近所に在住していた西島先生にしじまなる人物が転居する際、岡田が餞別として贈ったものだという。この年の12月、岡田は帝室技芸員の一人に任ぜられる栄誉を得る。66歳のことであった。

14	伊豆山風景	Landscape of Izusan	岡田三郎助	1935(昭和10)	65.1×100.1	油彩・カンヴァス	館蔵
	<p>山に抱かれるように広がる海</p> <p>1935(昭和10)年、岡田は伊豆・熱海を訪れ、本作や《淙々園にて》などの作品を描いた。森の陰影の描写は湾の稜線を際立たせ、穏やかに打ち寄せる海面との間にコントラストを生み出している。</p> <p>熱海には1895(明治28)年から鉄道が開通し、東京からほど近い景勝地として、多くの文化人や観光客を集めていた。</p>						
15	淙々園にて	At Soso-en	岡田三郎助	1935(昭和10)	40.9×53.0	油彩・カンヴァス	個人蔵(寄託)
	<p>涼しげな女性の姿</p> <p>滞在していた旅館にて、《伊豆山風景》と同じ湾を望んで描いた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝<small>くろだ せいき</small>の代表作《湖畔》(東京文化財研究所蔵)を思い起こさせる。モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子<small>きたむら ひさこ</small>。一心に読書にふける姿は、柔和ながら凜とした雰囲気漂わせる。</p>						
16	富士山図	Mt.Fuji	岡田三郎助	不詳	14.3×21.2	鉛筆・紙	館蔵
17	岩越国境	Border of Ganetsu	岡田三郎助	1915(大正4)	11.6×16.4	色鉛筆・紙	館蔵

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1-15-23
 TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006
 E-mail. hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp
 Web. <http://saga-museum.jp/museum/>